



風俗文選通釋

十五序十六
十七銘十八
歌誄

八割五
4218
7



利 5
號 4218
卷 7

風俗文選通釋卷之五

廣野集序

已亥

林義序

其前

此夜以... 以... 以...

風俗文選通釋

序類

余于... 於... 於...

此風俗文選通釋

序箴

十五之六

四卷

此風俗文選通釋廿四卷
 余于築地卯在務時書
 寫平一然合冊為十本宮
 安政五年年冬 藤白芝



風俗文選通釋卷之十五

- 曠野集序 芭蕉 猿蓑序 其角
- 宴柗後園序 支考 近江八景序 千那
- 四絶文章序 李由 要文集序 許六
- 画樓繪合序 許六 麻生後序 許六
- 銀河序 芭蕉 番椒序 野坡
- 序類

序の文飾の多し既承りしめよとて去方墮閑記の序より
 由序末序の序と云ふ御向の由の起りては書末の
 是よりさるるの序の由の起りては書末の
 序の由の起りては書末の
 系は抽出の如しと云書籍の序よりさるるのもの

此書意の推し

贗野集序

其角

此集元禄二年荷兮の撰むる所なり
其角の撰むる所なり
尾陽蓬丸檀木堂主人荷兮子集撰編むる所なり
何故は名所のりなり
後世に於て其の撰むる所なり
あつきて其の撰むる所なり
しき柳梅の撰むる所なり
しき御家の撰むる所なり
るの撰むる所なり
其角の撰むる所なり

此集元禄二年
其角の撰むる所なり

但芥子尾陽の撰むる所なり

楮葉序

其角

此集元禄二年
其角の撰むる所なり
佛僧の撰むる所なり
其角の撰むる所なり
此集元禄二年

あしむ心五徳のいふまゝに心なきにまききりて彼
西の上人の書ふ人作のしるしに解のいふまゝに
かじつるをまききりて人よに成て得ぬを五の書
のいふまゝに
あしむ心五徳のいふまゝに心なきにまききりて
あしむ心五徳のいふまゝに心なきにまききりて
あしむ心五徳のいふまゝに心なきにまききりて
あしむ心五徳のいふまゝに心なきにまききりて
あしむ心五徳のいふまゝに心なきにまききりて
あしむ心五徳のいふまゝに心なきにまききりて
あしむ心五徳のいふまゝに心なきにまききりて
あしむ心五徳のいふまゝに心なきにまききりて
あしむ心五徳のいふまゝに心なきにまききりて
あしむ心五徳のいふまゝに心なきにまききりて

冥柳後園序

支考

柳後園、吾仲の所居の標号也。洛陽五條に在りて是遊
宴のちを以て序をなす

世よあはれ人何しと後罪録續よまきのふ時、樂つきて後者の
やじむとあはれと一はたしのいふまゝに
あしむ心五徳のいふまゝに心なきにまききりて

莊子逍遙遊、帝途、贊祝、遊、者、心、有、天、遊、と、莊子
齊物論曰、乘雲氣、騎日月、而遊乎四海之外、大宗師曰
與造物者為人、而遊乎天地之一氣、皆天地の造に由る
て、あしむ心五徳のいふまゝに心なきにまききりて

美の天女... 一し... 人... 花... 人...
~~~~~

三日月の影... 三日月の影... 三日月の影...  
~~~~~

今... 月... 影... 影... 影...
~~~~~

美酒多し李白春夜宴桃李園序曰如詩不成罰依金  
谷酒數三斗と罰... 斗ハ飲酒の量なり...  
~~~~~

三日月の影

近江八景序

千那

近江八景ハ近衛政家公の詠歌相國寺林長老の詩あり
湖水賦ニ其の序あり其の序ハ繪巻物の序文
ありて由序とやいふ

近江八景ハ湖水の絶景ありて比叢山園より三井原山より
なりて粟津幸海なる海一輪田幸福と合を満洲の八景
なりて八の下の定むるのつゝ水福寺五仲家の月々
近衛の政家公なるものありて是れ近江八景とて
近江の八景なる詠歌の十境詠をいふものなり
此の八景ハ八の下の定むるのつゝ水福寺五仲家の月々
なりて粟津幸海なる海一輪田幸福と合を満洲の八景
なりて八の下の定むるのつゝ水福寺五仲家の月々

此の八景ハ八の下の定むるのつゝ水福寺五仲家の月々
なりて粟津幸海なる海一輪田幸福と合を満洲の八景
なりて八の下の定むるのつゝ水福寺五仲家の月々

由紀 是唐書滿洲の事ありて八の下の定むるのつゝ水福寺五仲家の月々

五平 仲秋政家公の詠歌ありて是れ八景の十境詠をいふものなり
是の八景ハ八の下の定むるのつゝ水福寺五仲家の月々
近江八景ハ明應九年八月十日近江守公家作
詠歌の詠ありて近江守公家作詠歌の序ありて是れ八景の十境詠をいふものなり
八景の序ありて是れ八景の十境詠をいふものなり
十九日 是れ八景の十境詠をいふものなり
了 水福寺年成の月をありて是れ八景の十境詠をいふものなり
詠歌ありて是れ八景の十境詠をいふものなり
ありて是れ八景の十境詠をいふものなり
ありて是れ八景の十境詠をいふものなり
八景の古歌ハ八の下の定むるのつゝ水福寺五仲家の月々

更樓の許六の作る糸繪合其樓より徳ありけ云其
るの序とる也

初巻の序へ繪師の中にお大雅の家が建てて不動の妙筆
と云ふは他は圖を趣き漢土の意を以て書くのみ何れか
人の心より當世の風情を意する一者或は福祿壽の三事か
やらんといふは(一)画師の列に入らざるは(二)解いたしむるは
才一書の人を好むべし(三)流るるを好むべし(四)座をたぐる人の格を
造るべし人の格と起るるの心は後て云ふ所の精神所出
梅下画の序へ是れ後とるべしとるべし

此巻の初巻の序とるは(一)画師の列に入らざるは(二)解いたしむるは
才一書の人を好むべし(三)流るるを好むべし(四)座をたぐる人の格を
造るべし人の格と起るるの心は後て云ふ所の精神所出
梅下画の序へ是れ後とるべしとるべし

良秀の序とるは(一)画師の列に入らざるは(二)解いたしむるは
才一書の人を好むべし(三)流るるを好むべし(四)座をたぐる人の格を
造るべし人の格と起るるの心は後て云ふ所の精神所出
梅下画の序へ是れ後とるべしとるべし

此の通りでございませう。いともあつうの事候へども、
 ちとふ勤を今よ今よと申すは、此は果を不勤の事を
 こそ申す。一は申すに申すの申す。一は申すに申す
 周文と申す。一は申すの申す。一は申すの申す。

此の通りでございませう。いともあつうの事候へども、
 ちとふ勤を今よ今よと申すは、此は果を不勤の事を
 こそ申す。一は申すに申すの申す。一は申すに申す
 周文と申す。一は申すの申す。一は申すの申す。

此の通りでございませう。いともあつうの事候へども、
 ちとふ勤を今よ今よと申すは、此は果を不勤の事を
 こそ申す。一は申すに申すの申す。一は申すに申す
 周文と申す。一は申すの申す。一は申すの申す。

是より許六みつこの事候へども、書橋は作らざりし。沈病
 老病といふ事候へども、病はなほつゝ。一は申すに申す
 莊子、胡蝶の夢の事候へども、莊子、夢はなほつゝ。一は申すに申す

王維の昔のけしきもよはの音とていふ消魂野腸の
秋情もそ旅夢いそぐに列女を惜みしれ花白髪
の仰う〜秋夜のきき寂寥の餘情北風の早涼
席の何れもましく半眼もまをさる〜
帝をよき世に此の山を惜みそ〜
惜みとあり〜
とあり北風のり〜
好む方より〜

番椒序

野坡

此番椒序もよ花白〜
り〜

ゆ〜の名は南寧〜
〜

此番椒の山名〜
南寧唐長中此與煙草同防將未也中華亦大明
之末始有之故本草綱目未載之〜
〜
遊戲の文事〜
〜

醜習子天の〜
〜
和漢ニヤ國會又云或裁益中玩賞之五月開小白花結

子有數品如筆頭如椎子如櫻桃如榉枿或櫟生或向
上皆生青熟赤云今云名目八人の見る如よりては
かろへ一是其種類の多きと其名目はかく

かぬやんくろや石菘のせりね竹掃場まじり
けりよとのはなとよふ雷スライガキのれんあけ物瓶
培まて庭根のとき二階の西物りの日陰にたのりね
かたあやしくてけりねのりよとよふはのよけり
思ふにたまはつて好つては益ニククなかつては益を
のりよとよふけりねはなとよふはのよけり
ましくは奴僕豆腐の尻紅のりよとよふはのよけり
せりねとよふとあつて人世のりよとよふはのよけり
よのりよとよふはのりよとよふはのりよとよふ

何れもつとてやけりねのりよとよふはのりよとよふ
世もつとてやけりねのりよとよふはのりよとよふ
よのりよとよふはのりよとよふはのりよとよふ

は言ふは葉枯の上のりよとよふはのりよとよふ
ころつて好つてはなとよふはのりよとよふ
よのりよとよふはのりよとよふはのりよとよふ
よのりよとよふはのりよとよふはのりよとよふ
よのりよとよふはのりよとよふはのりよとよふ
よのりよとよふはのりよとよふはのりよとよふ
よのりよとよふはのりよとよふはのりよとよふ

石菘のりよとよふはのりよとよふはのりよとよふ
石菘のりよとよふはのりよとよふはのりよとよふ

乃屋を極むるは其の如くは心は其の如くは
情の如くは心は其の如くは心は其の如くは

凡俗文選通釋卷之十五終

風俗文選通釋卷之十六

飲食色欲箴

許六

聽箴

許六

卷之六

箴類

箴人の如くは心は其の如くは心は其の如くは
心は其の如くは心は其の如くは心は其の如くは
心は其の如くは心は其の如くは心は其の如くは
心は其の如くは心は其の如くは心は其の如くは

飲食色欲箴

許六

是人如くは心は其の如くは心は其の如くは
心は其の如くは心は其の如くは心は其の如くは
心は其の如くは心は其の如くは心は其の如くは
心は其の如くは心は其の如くは心は其の如くは
心は其の如くは心は其の如くは心は其の如くは

曰よりサレテ其病不生也といふ教ふふしきり甚しき
極り甚制せり故に和物有るのみならず其の心にも
とと色に風雅に風雅に仁に惻隱の心あり 大舜の二女
嬀と玃と今日世にその時にも畜生といふ後と及
サレハ是等何れよりと成りしや元来畜生といふ姉妹と
姉と妹といふは一人偏に姉妹と姉といふは道に在りし
に彼教の後に生るる存の才とてその存は五倫の始と
とけり 若周公孔子五性精の處より人の子を
才の者なるをいふは是も聖人の才の才といふは
桀紂の極悪も子なるは是も君子也 夫ら君子と
いふは

此書に此歳の書端於序文の如しもの也其の常也といふ

常ある如き書はのべしと悪は是も其の常といふは
食の礼も亦く之に氏と共にせしや 此處ありや
昔子下篇曰取食之重者與礼之輕者而比之矣 翅
食重食せしが飢と死と礼も食の重きなり是
くも言ふべきも何れも梁惠王下篇曰昔者大王
好色愛厥妃王如好色與百姓同之於王何有 其の
心引くは百世皆夫婦の心とすはけり世に治平
なりと色と好食とを言ふは物なきは是も其の
とき甘んじりしに其の失はれ大病不生といふ教は神
儒佛のみならず其の惻隱の心も是も其の也 孫丑
上篇曰惻隱之心仁之端也 惻隱の物の終るは
其の至るは知るは仁の心也 風雅の人偏る其の情は

切なりゆはるるをいふ堂後より金瓶にちりまははるははるははるは
 美にあらざるもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 多の春属の食にちりゆんまういふもいふもいふもいふもいふもいふも
 くのめいゆんまういふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 海をいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 て一人の命をちりまういふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 ちりまういふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

此言は佛教とていふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 じり也西域より天竺のよりいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 報考はあふいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 是子孫をいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 ぬぬいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

ちりまういふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 ちりまういふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 者いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 平地いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 屋敷いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 ぬぬいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 平家いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 河原いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 ちりまういふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 ぬぬいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 ちりまういふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 ぬぬいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 ちりまういふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 ぬぬいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

昔より御座りしよし能く語りしよしはてしなくあり
しりしよしあり

温純にけしほちし書きおこしむと感しむかたしき茶
海石を茶あまらけしむるよしはけしむるよしは
すねる極みの物に名をあらはせしむるよしは
高らるる奇をすくじ人あまらけしむるよしは
信に伝ふまの酒にけしむるよしは茶のけしむるよしは
のよしは酒のけしむるよしは茶のけしむるよしは
生かすあらはせしむるよしは角をけしむるよしは

此温純にけしむるよしは茶のけしむるよしは
茶のけしむるよしは茶のけしむるよしは
のよしは角をけしむるよしは

角をけしむるよしは茶のけしむるよしは
後高儀より角をけしむるよしは

傾城のよしは茶のけしむるよしは
少くともけしむるよしは茶のけしむるよしは
好女のよしは茶のけしむるよしは
傾城のよしは茶のけしむるよしは
まのけしむるよしは

茶のけしむるよしは茶のけしむるよしは
茶のけしむるよしは茶のけしむるよしは
茶のけしむるよしは茶のけしむるよしは
茶のけしむるよしは茶のけしむるよしは

茶のけしむるよしは茶のけしむるよしは

綱の美の香とほりしきものも鼻屎とて洩れぬるなり
ありきやいしや

編くふのい美顔のつとむるは平かぬとて
りるものも田舎の服のつとむるは後かぬとて
しむるものもあつてよ物かぬとてつとむるは
かいらつとむるはつとむるはつとむるは
のつとむるはつとむるはつとむるは
つとむるはつとむるはつとむるはつとむるは
つとむるはつとむるはつとむるはつとむるは
つとむるはつとむるはつとむるはつとむるは
つとむるはつとむるはつとむるはつとむるは

柄の芥の香のつとむるは維子の香かぬとて
つとむるはつとむるはつとむるはつとむるは

生海花のつとむるは白い香かぬとて
つとむるはつとむるはつとむるはつとむるは
つとむるはつとむるはつとむるはつとむるは
つとむるはつとむるはつとむるはつとむるは
つとむるはつとむるはつとむるはつとむるは
つとむるはつとむるはつとむるはつとむるは

つとむるはつとむるはつとむるはつとむるは
つとむるはつとむるはつとむるはつとむるは
つとむるはつとむるはつとむるはつとむるは

かきこむはけは是れ也はをふするもたつて一和漢の序の
お達りつる戸万拜きつるしとるを待た作まじり
其國のいふたぬらぬらとてきぬらぬらとてしつる
いふたぬらぬらとてきぬらぬらとてしつる

は言身なきを別するは身の役なきをわづらひて提記
するは身なきの役者なるを言身と篇曰身目之官不
思而蔽官つる職のいひて故よりなきはの役を
役人なりとて悪評なきを悪評なきを役人のつ
しみて孔子非礼勿聴と顔淵曰亦も正叔の歳ハ
此後之役事しとて言身とて此歳との異同得失ハ其論す
神の時なきは言身とて言身とて言身とて言身とて
は身の役人なりとて言身とて言身とて言身とて

らるる後言のぬらぬらとて但子規なきは言身とて
言身とて言身とて言身とて言身とて言身とて

琴のまじりしは禁の家のいふは言身とて言身とて
言身とて言身とて言身とて言身とて言身とて
言身とて言身とて言身とて言身とて言身とて

此言甘きふらうて其志情のいふ言身とて言身とて
禁の家のいふ言身とて言身とて言身とて言身とて
正人心也其詳のいふ言身とて言身とて言身とて
喜怒哀樂の信り言身とて言身とて言身とて言身とて
君子琴の志を言身とて言身とて言身とて言身とて
春の常信たる言身とて言身とて言身とて言身とて
言身とて言身とて言身とて言身とて言身とて

樂よ及いふ解と流るる無別中も身の後ろの音信の
而くくしてきて其の音信は是れ身とありて心とありて
亦く又解人の耳と愛解とありて心とありて身とありて
いふるはあつたまはしつゝの心とありて身とありて
病のちよき喜病根の根とありて其の心とありて身とありて
身

評、曰程正叔の歳日見光と美色とて月とありて
年とありて月とありて是れは在りて身とありて心とありて
今とありて身とありて心とありて是れは在りて身とありて
物とありて心とありて是れは在りて身とありて心とありて
身とありて心とありて是れは在りて身とありて心とありて
まゝとありて心とありて是れは在りて身とありて心とありて

蘇舜欽色不見圖とありて心とありて身とありて
あつたまはしつゝの心とありて身とありて
とありて心とありて是れは在りて身とありて心とありて
とありて心とありて是れは在りて身とありて心とありて
とありて心とありて是れは在りて身とありて心とありて
とありて心とありて是れは在りて身とありて心とありて
とありて心とありて是れは在りて身とありて心とありて
とありて心とありて是れは在りて身とありて心とありて

風俗文選通釋

歌 銘 誄

十七之八

風俗文選通釋卷之十七

札銘

銘

東銘

人考

西銘

銘

東銘

人考

青華園銘

銘

東銘

人考

在古銘

銘

東銘

人考

風俗文選通釋卷之十七

札銘
銘
東銘
人考
西銘
銘
東銘
人考
青華園銘
銘
東銘
人考
在古銘
銘
東銘
人考

風俗文選通釋卷之二十七

机銘

芭蕉

東銘

支考

西銘

許六

茶碗銘

嵐雪

雲華園銘

汶村

飯鉢銘

吾仲

座右銘

芭蕉

是非齋銘

許六

銘類

銘ハ釋名曰名也集韻曰志也大學湯之盤銘曰
之誨銘銘其器以自敬言之詞也大戴禮武王
踐阼篇曰王端冕師尚父亦端冕奉書王聞書
言暢若恐懼退而為戒書之席之四端鑑盥盤
楹杖帶履屨之類悉銘以作時勸懲之用也
戒の詞といふ又功名器亦悉銘之といふ文の

醫術の精研皆凡ありて其道の家は是れ一物之用に
取るといふも一物と云ふは乾坤の二卦の潜龍は
乾の卦の初九の爻辭に初陽なりといふは施用すべき時
ありは故に潜龍を利也馬之貞といふ坤の卦の象辭也
此馬ハ東嶺の行くの也是坤の象之貞といふ能く
その行くの事乾坤の二卦の御の形則ち是れ是れ
之の行くを潜龍北馬の貞といふ是れは其の
二用とせんや又二用とせんやと陰陽二象の分其其の
運動之或は二氣の以て言ひ或は三氣の以て言ひ潜龍陽之
北馬ハ陰なり是れ合して一用とせんや又二用とせんや
戒ハ乾坤のやたらよと云ふ蓋元龍の悔野に乾の失
子ハ能く是れは二用とせんや又二用とせんや

周孔の精研も又潜龍のやたらより又天年ハ樂し
性命ハ今をせんよと云ふ是れ是れの時中より一物
之用と乾坤の二用と互に其の二用とせんや此れ
の二用の意中より一用とせんや又二用とせんや

東銘

支考

雙白堂主野紅子夫妻相共好風雅因有雙白之号
東銘指野紅西銘曰其妻

愚按張子厚東西銘銘其書室之西牖曰乾稱父
坤稱母乾道成男坤道成女今以東銘為夫以西
銘為妻自有謂焉

若の人の繪の書より一丹青の後のより一白の一字

天香閣の茶葉の味は、
山一の味は、
茶葉の味は、
山一

雲華園記

五老井四絶一章也

汶村

黄山谷の所居洪州分寧縣、
茶風風、山谷、
茶風風、山谷

制製、
の井、
白雲満、
銘文、
又茶、
杜牧、
とて、
地、
とて、
を、

宇治田原ハ又其時之壁山禪師其雅々々唐茶の瑞英
と割取ると世の凡そ唐茶を多しと云ふは道出の茶之それ
より首のそだ茶種を以てて給は少給ふに多すけ凡下
牀のそだ茶種を以てて給は少給ふに多すけ凡下

能くまふは 能くまふは

よく作る よく作る

能くまふは 能くまふは

文の徳と兼ふとも茶何れもよく出はりて茶もよく
作るも龍焙金砂の二茶は茶のまふよりその向の
柳のまふとも好子、五葉井の好子、は茶と云ふは
白や満庵茶種細とてふは茶のまふよりその向の志
とすは唐茶今七種といふは茶のまふよりその向の志

歸田録曰茶莫貴於龍風園蓋茶君謨福建運使が
始く小片の龍茶を作ら其旨絶精とては少茶園と云
一斤の價黄金二両と云風風山北苑富沙城の北又
あり首茶を作ら御園之其茶の價又高とては少
は天福殿天皇弘治元年茶の偏成始とては陸羽字鴻漸
茶種一者好作者とて建州北苑先春龍焙洪州雙井
顧渚紫笋陽羨春池蒙頂石花皆茶之極品也と
ては海人藻谷曰茶者自上古在我朝挽茶節會
於内裏被行公事儀式葉上僧正入宋之時重被渡
茶種梅尾明惠上人觀之鳥胤同兒集曰後鳥羽院の
御宇明惠宇治梅尾茶種は壁山禪師來朝と
云ハ黃蘗山隱元禪師の事とては禪師諱ハ隆琦

香のてはけり折し入けては... 又ハ多る...
やうあり... せいの也

此後男文字四言十句... 此言彼報の
形多の... 吾仲... 人... 此言...
二言... 其言... 此言...
此言... 報好也

世の人... 此言... 此言...
此言... 此言... 此言...
此言... 此言... 此言...

何れ... 此言... 此言...
此言... 此言... 此言...
此言... 此言... 此言...

此言... 此言... 此言...
此言... 此言... 此言...
此言... 此言... 此言...
此言... 此言... 此言...

此言... 此言... 此言...
此言... 此言... 此言...
此言... 此言... 此言...

南嶽華嚴三見
 破頌、三聖八辯子印。
 不破、總頌、四三東啟
 多の多の互ト、三佛印
 ヲ前ニ時佛印曰、吾批
 花破ヲ付タリ甚、交
 一ト共ニ三聖テ眉ヲヒム
 時人称シテ三敵トシ、
 然ルニ石破山谷佛印
 ヲ誤リテ、老子孔子釋
 也トス信後川が京華
 集、亦右ノ流トリ誤、
 未ルカ、

連取又入らしむるあの方よりゆまじ

是ハ前ニ百より末の長徳よりくる此徳多し一彫吸の
 之毎ハ孔子釋迦在るる、東花坊三願因疑、曰人法
 者從孔子之諷諫居心法者傳釋子之虛冥、此文法
 者效、莊子之形容、歷云孔子釋尊、莊子彫吸之言、
 之之傳、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、
 道ハ彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、
 之、道ハ彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、
 是、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、
 人、物、心、身、心、身、心、身、心、身、心、身、心、身、心、身、心、身、
 知、之、其、自、在、性、の、心、此、之、心、の、心、若、若、若、若、若、若、若、若、
 今、之、心、身、心、身、心、身、心、身、心、身、心、身、心、身、心、身、心、身、

此徳ハ彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、
 爾、惟、鹽、梅、是、徳、美、の、作、の、徳、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、
 一、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、
 宗、補、作、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、
 之、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、
 連、取、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、
 之、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、
 之、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、彫吸、

風俗文選通釋卷之十八

嵐蘭誄

芭蕉

犬舛誄

去来

去来誄

許六

誄類

誄者哀死而述其行之辭也釋名曰誄田宗也累列其事是誄の文體と知る幣志

嵐蘭誄

嵐蘭ハ松倉又五郎と云江戸谷中臨松寺に墓あり
強念より碑を死して芭蕉の誄あり此誄と云

金華の碑ありと敬く撰するは古の志の文解の偏を
とる天子のいふに松倉嵐蘭ハ義の者なり其
腸を在在の魂をけりて風雅と肺腑のつらさを

厚ハ多職のりてささるるの如くはらりまきりし由
其のよき所へりりいふ事なきまきりし由はたりの證考
かるる名所へりりいふ事なきまきりし由はたりの證考
物とささるる事なきまきりし由はたりの證考

いふはたりの證考の事なきまきりし由はたりの證考
ては悔の事なきまきりし由はたりの證考
事の終りの事なきまきりし由はたりの證考
初めはたりの證考の事なきまきりし由はたりの證考
因はたりの證考の事なきまきりし由はたりの證考
とてする事なきまきりし由はたりの證考
五歳の事なきまきりし由はたりの證考
ささるる事なきまきりし由はたりの證考

いふはたりの證考の事なきまきりし由はたりの證考
いふはたりの證考の事なきまきりし由はたりの證考
いふはたりの證考の事なきまきりし由はたりの證考

秋の事なきまきりし由はたりの證考

はたりの證考の事なきまきりし由はたりの證考
歳の事なきまきりし由はたりの證考
穎悟神彩秀徹視目不眩裴楷見面目之曰我眼
爛如巖下電
いふはたりの證考の事なきまきりし由はたりの證考
いふはたりの證考の事なきまきりし由はたりの證考
いふはたりの證考の事なきまきりし由はたりの證考

可憐なるいぢり

此言難修まのり何んをきき盡る所は長月映りの
おろしなること世間をけりて物ふかきくは是
水ぬきいあやとて集る人の中をきき盡る所は
う縁ありて秀ちけりて本言乙別はまた平田の書中
つし居てまた惟ねとてしりて物ふかきくは是

中略

山井うらねおれん 時あは 晋子

まらきそつららう 出るをよは 志考

病人のあきうすうや みるは 志考

うらねはあはれあはれ 志考

吹波の浦にわらわぬ深の村のありて名をよき世徳院

若るうらねはあはれあはれ 志考

山井又山井の影の影にうらねはあはれあはれ

先師はは後ハ信宗松の流をききあはれあはれ

義仲寺の上の山にまき居るはしりてあはれあはれ 時と門自啟曲々

水相逢りて 水かきあはれあはれ 杖の杖にまき居るはしりてあはれあはれ

あはれあはれ 都のる親もあはれあはれ 杖の杖にまき居るはしりてあはれあはれ

脚下琵琶水指頭花流しと 杖の杖にまき居るはしりてあはれあはれ

あはれあはれ 杖の杖にまき居るはしりてあはれあはれ 杖の杖にまき居るはしりてあはれあはれ

名取の陣旗なるはしりてあはれあはれ 杖の杖にまき居るはしりてあはれあはれ

みるはあはれあはれ 杖の杖にまき居るはしりてあはれあはれ 杖の杖にまき居るはしりてあはれあはれ

あはれあはれ 杖の杖にまき居るはしりてあはれあはれ 杖の杖にまき居るはしりてあはれあはれ

あはれあはれ 杖の杖にまき居るはしりてあはれあはれ 杖の杖にまき居るはしりてあはれあはれ

欲^{スホコラント}考^ト爾^ニ是^レ寶^ノ滿^ル山^ニ雷^ノ雨^ニ震^ル寒^ノ更^ニと^ル昔^ノ一^ノ出^ルれ^ル夜^ノ解^ル
り^ニ身^ノぬ^ル身^ノの^レ不^レ啼^クつ^ニと^ル成^ルと^ルき^ニよ^リ一^ノ雪^ノ勢^ノの^レ宣^ルと
わ^レい^レり^レち^レる^レ今^ノし^ノう^ノき^ノ名^ノの^レ跡^ノら

此^ノ言^ヲ去^レ来^ノ文^ノ章^ノの^レ往^ル來^ノの^レま^ニび^ニ云^フ草^ノ菴^ノの^レ丈^ノの^レ松^ノの^レ如^ク
の^レ所^ノに^レ故^ノま^ニ去^レ来^ノの^レま^ニび^ニ云^フ何^ノの^レ對^ノの^レ時^ノ
の^レ自^レ故^ノと^ルふ^レ丈^ノの^レ脚^ノ下^ノに^レ登^ル胡^ノの^レま^ニび^ニ去^レ来^ノ
雪^ノの^レ勢^ノの^レま^ニび^ニ云^フ何^ノの^レ對^ノの^レ時^ノ
の^レ自^レ故^ノと^ルふ^レ丈^ノの^レ脚^ノ下^ノに^レ登^ル胡^ノの^レま^ニび^ニ去^レ来^ノ

凡^ノ十^ノ年^ノの^レ為^ノの^レま^ニび^ニ云^フ何^ノの^レ對^ノの^レ時^ノ
の^レ自^レ故^ノと^ルふ^レ丈^ノの^レ脚^ノ下^ノに^レ登^ル胡^ノの^レま^ニび^ニ去^レ来^ノ
雪^ノの^レ勢^ノの^レま^ニび^ニ云^フ何^ノの^レ對^ノの^レ時^ノ
の^レ自^レ故^ノと^ルふ^レ丈^ノの^レ脚^ノ下^ノに^レ登^ル胡^ノの^レま^ニび^ニ去^レ来^ノ

何^ノの^レ對^ノの^レ時^ノ
の^レ自^レ故^ノと^ルふ^レ丈^ノの^レ脚^ノ下^ノに^レ登^ル胡^ノの^レま^ニび^ニ去^レ来^ノ

此^ノ言^ヲ去^レ来^ノ文^ノ章^ノの^レ往^ル來^ノの^レま^ニび^ニ云^フ何^ノの^レ對^ノの^レ時^ノ
の^レ自^レ故^ノと^ルふ^レ丈^ノの^レ脚^ノ下^ノに^レ登^ル胡^ノの^レま^ニび^ニ去^レ来^ノ
雪^ノの^レ勢^ノの^レま^ニび^ニ云^フ何^ノの^レ對^ノの^レ時^ノ
の^レ自^レ故^ノと^ルふ^レ丈^ノの^レ脚^ノ下^ノに^レ登^ル胡^ノの^レま^ニび^ニ去^レ来^ノ

去^レ来^ノ誄

評^六

去^レ来^ノ誄^ノの^レ直^ノ抄^ノの^レま^ニび^ニ云^フ何^ノの^レ對^ノの^レ時^ノ
の^レ自^レ故^ノと^ルふ^レ丈^ノの^レ脚^ノ下^ノに^レ登^ル胡^ノの^レま^ニび^ニ去^レ来^ノ
雪^ノの^レ勢^ノの^レま^ニび^ニ云^フ何^ノの^レ對^ノの^レ時^ノ
の^レ自^レ故^ノと^ルふ^レ丈^ノの^レ脚^ノ下^ノに^レ登^ル胡^ノの^レま^ニび^ニ去^レ来^ノ

維^ノ宝^ノ永^ノ元^ノ甲^ノ申^ノの^レ年^ノ秋^ノ九^ノ月^ノ落^ノ後^ノ舎^ノの^レま^ニび^ニ云^フ何^ノの^レ對^ノの^レ時^ノ
の^レ自^レ故^ノと^ルふ^レ丈^ノの^レ脚^ノ下^ノに^レ登^ル胡^ノの^レま^ニび^ニ去^レ来^ノ
雪^ノの^レ勢^ノの^レま^ニび^ニ云^フ何^ノの^レ對^ノの^レ時^ノ
の^レ自^レ故^ノと^ルふ^レ丈^ノの^レ脚^ノ下^ノに^レ登^ル胡^ノの^レま^ニび^ニ去^レ来^ノ

ら秀徳は十九年と云ふは十五年迄の事と合せしむ
二十年春の大徳王の命は是と云ふ人といふ也

此言吉兼の物故と云ふは凡山書之稱典礼の事と

卒といふは不福といふ唐人が死するに依る稱法也

と卒去といふは去るの事と云ふ唐民の死を云ふ也

吉兼の卒は二十一年吉兼の肥前の國長門守に被地を

の爲國向井元牛の二子と云ふ謀を事としし事也

その事吉兼又持てしむ天文曆を事通し治教の法

又沈重の事は程程が判事の事なり程重の事は

官務の事也吉兼の事は程重の事なり程重の事

程重の事なり又程重の事は程重の事なり程重の事

略しや月日不明
十五の事あり

吉兼の隠居する事程重の事なり程重の事
その中程重の事程重の事程重の事程重の事

程重の事

いふは吉兼の先師程重の事なり程重の事

いふは程重の事なり程重の事程重の事

天下進門の事なり程重の事程重の事

胡の事なり程重の事程重の事

不易の事なり程重の事程重の事

細く云ふ事

本一の事なり程重の事程重の事

いふは程重の事なり程重の事程重の事

いふは程重の事

若くは或るやうなまじらうのまゝかたてを師の身に
おろし一月の間の事古今の書物にまじらひて
一代書述の二面をもつて人々掃きつゝ一冊のいふこと数句の
及らば

此書は東の御書にしろく功とあり南西の島に押し
三ノ國西ノ平ノ國の御書にしろく功とあり北の御書に
は昔在昔の正風をまじりて流法をまじりてわがわが
様への流法をまじりて其集りては自らいふやうに
世文中にしろく功とあり世書述の事許すべしとあり
乞ふ事やうな御書なり

二十餘年薪水の功後て張磯の庄持合を師とむる石山の
外住高元は流法にしろく功とあり世書述の事許すべしとあり
しるるにまじりて義仲との事あり肩衣の御書に流法に
の城の御書にしろく功とあり世書述の事許すべしとあり
方後流法の書の御書にしろく功とあり世書述の事許すべしとあり
此秋御書にしろく功とあり世書述の事許すべしとあり
之度も他の御書にしろく功とあり世書述の事許すべしとあり
まじりて平の御書にしろく功とあり世書述の事許すべしとあり
卒に秋九月廿日即ちしろく功とあり世書述の事許すべしとあり
断せらるるや流法にしろく功とあり世書述の事許すべしとあり
せらるるにしろく功とあり世書述の事許すべしとあり
因縁の御書にしろく功とあり世書述の事許すべしとあり
昔の御書にしろく功とあり世書述の事許すべしとあり

此書は古書に師にしろく功とあり世書述の事許すべしとあり

おぼくは人の子に生れしにまはるにまはるにまはるに
まはるにまはるにまはるにまはるにまはるにまはるに
まはるにまはるにまはるにまはるにまはるにまはるに

此の書は多し其の意は多し其の意は多し其の意は多し

誠の心は世に生れしにまはるにまはるにまはるに
先師の心は世に生れしにまはるにまはるにまはるに
あはれしにまはるにまはるにまはるにまはるにまはるに
まはるにまはるにまはるにまはるにまはるにまはるに
まはるにまはるにまはるにまはるにまはるにまはるに

此の書は多し其の意は多し其の意は多し其の意は多し
まはるにまはるにまはるにまはるにまはるにまはるに
まはるにまはるにまはるにまはるにまはるにまはるに
まはるにまはるにまはるにまはるにまはるにまはるに

家の聖護院の書は多し其の意は多し其の意は多し其の意は多し
まはるにまはるにまはるにまはるにまはるにまはるに
まはるにまはるにまはるにまはるにまはるにまはるに
まはるにまはるにまはるにまはるにまはるにまはるに

此の書は多し其の意は多し其の意は多し其の意は多し
まはるにまはるにまはるにまはるにまはるにまはるに
まはるにまはるにまはるにまはるにまはるにまはるに
まはるにまはるにまはるにまはるにまはるにまはるに

家の聖護院の書は多し其の意は多し其の意は多し其の意は多し
まはるにまはるにまはるにまはるにまはるにまはるに
まはるにまはるにまはるにまはるにまはるにまはるに
まはるにまはるにまはるにまはるにまはるにまはるに

二階のつらさ

古来

ちよとつらさのつらさのつらさのつらさのつらさ

此部歌のつらさのつらさのつらさのつらさのつらさ

ちよとつらさのつらさのつらさのつらさのつらさ

ちよとつらさのつらさのつらさのつらさのつらさ

ちよとつらさのつらさのつらさのつらさのつらさ

ちよとつらさのつらさのつらさのつらさのつらさ

ちよとつらさのつらさのつらさのつらさのつらさ

ちよとつらさのつらさのつらさのつらさのつらさ

ちよとつらさ

許六

ちよとつらさのつらさのつらさのつらさのつらさ

ちよとつらさのつらさのつらさのつらさのつらさ

浅草のつらさのつらさのつらさのつらさのつらさ

ちよとつらさのつらさのつらさのつらさのつらさ

ちよとつらさのつらさのつらさのつらさのつらさ

ちよとつらさ

風俗文選通釋卷之十八終

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowed paper. The script is dense and fills most of the page. There are some faint markings and a small red stain on the page.

